

## 研修報告書

安芸府中高等学校  
吉迫 里香

### はじめに

期待と不安の入り混じった気持ちでハワイに到着した時のことを今でも覚えている。ホノルル国際空港でこのプログラムのコーディネーターを務める Tsurutani 氏とハリス氏に出迎えてもらい、そこから大変有意義な KCC での研修が始まった。このプログラムは自分自身を英語に触れさせ、英語教育の知識を深め、周りの人との良好なコミュニケーションを図る機会を多く与えてくれた。3週間という限られた期間の中で、素晴らしいスタッフに助けられ、恵まれた環境を与えてもらい、多くのことを学べたと思う。この研修を通して、自分が感じたこと、学んだこと、気付いたことをまとめてみたい。

### KCC について

KCC (ハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ) はダイヤモンドヘッドの裾野に位置しており、ワイキキからのアクセスも非常に良い。キャンパス内には緑が多く、建物も周りの景観に合うようにデザインされており、落ち着いた雰囲気であった。KCC には約35の国から集まった様々なバックグラウンドを持つ7600人以上の学生が在籍しており、彼らは優れた ESL プログラムを含む様々な教育課程を履修している。その中でも特徴的なのは、料理学コースである。そこで学ぶ学生たちは、学内のカフェテリアや併設されているレストランの運営なども任されており、実践的な取り組みを行っている。

また、KCC には優れたスタッフが多く、私たちが心から歓迎してくれた。このプログラムのオープニングセレモニーで、副学長の Dr. Paggoto は私たちを受け入れることで自分たちも学ぶことができ、KCC の理念である “Strive for the Highest” (最高を目指す) の助けになると歓迎の言葉を述べてくださった。彼らの前向きな姿勢と理念に感激すると同時に、自分自身の学ぶ姿勢も、また教師として教える姿勢も “Strive for the Highest” でありたいと思った。

### 授業について

授業は主に「英語教授法演習」「上級言語発達セミナー」「教育セミナー」の3つで構成されていた。研修の最終的な目標は自分の英語の授業に contend-based の考えを盛り込んだ単元計画を立てて模擬授業をすること、英語教育に関する簡単な調査研究を行うこと、そしてその内容についてパワーポイントを使ってプレゼンテーションをすることであった。

### 英語教授法演習について

Malm 教授の最初の授業で Contend-Based Instruction(CBI)を紹介された。これはテーマやトピックといった内容を中心に授業を体系づける ESL のプログラムである。言語技能を統合させること、自然で意味のあるコミュニケーションを図ること、一貫性のあるテーマに関連した様々な活動や情報が提供できるという点で効果的な言語教授法であると考えられている。この演習全体を通して CBI に基づいた様々な手法や活動が紹介され、授業改善に役立つヒントを多くいただ

いた。

### ブレンストーミング

最初の演習はブレンストーミングであった。この活動では、より多くのアイデアを出すため思い浮かんだことを何でも書き出していった。答えに正解・不正解があるわけではないので、思い思いの考えを出しやすかった。最初の質問は「自分の英語の授業における課題は何か。」であった。参加者で意見を出し合った後、Malm 教授がそれらを分かりやすくまとめてくれた。共通する課題として「授業がいつも教師主体で文法訳読が中心になること。」「生徒は覚えた紋切り型の返答しかできないこと。」「語順が分からず、適切な文章が書けないこと。」等の意見が出た。質問事項はこの研修の目的を明らかにできるように構成されており、「生徒の英語学習に役立つ授業実践としてどのようなものがあるか。(自己の授業分析)」「生徒の興味・関心は何か。(生徒分析)」「これからの2週間の目標は何か。何が学びたいか。何を改善したいか。どのような情報が必要か。(課題意識の喚起と目標設定)」というものが続いた。これらの質問に答えるのは容易ではなかったが、自分自身や自分の授業を振り返るよいきっかけとなった。活動を通して考えたことは後にリサーチペーパーのトピックを決める上で非常に役に立った。

### コミュニケーション活動

授業をより生徒主体でコミュニケーションにするための活動をたくさん提示してもらい、それらのいくつかを実際に演習してみた。最も印象に残っているのは、“strip story”と“poster session”という活動である。“strip story”は一人一人がストーリーの一部を記憶し、グループでそれらの情報を交換しながらストーリーを再現していく活動であり、生徒同士の相互交流(interaction)を促進する。実際に演習する中で、単なる情報交換に終わるのではなく、お互いにはっきりと理解するために英語を使って聞き返したり、確認したりする場面が生まれ、より本物のコミュニケーションに近い活動となった。一方“poster session”はプレゼンテーション活動の一種である。演習では、KCCの生徒が作ったポスターを基に、即興のプレゼンテーションを実際に行った。私たちは1回ずつしか行わなかったが、Malm教授のクラスでは、発表者が同じ発表を繰り返してきよう聴衆役を4,5グループ作るそうである。そうすることにより、発表者は話すことに慣れ、回を重ねる毎に上達していることを実感できる。この方法はスピーキング能力を高める上で効果的であると感じた。

紹介されたものの中には、すでに知っているものもあったが、それらの活動も生徒主体つまり、いかに生徒同士が相互交流できるかという視点で考えることにより、より活動がコミュニケーションになり得ることが分かった。私自身、教科書を教えることに終始している実態を省みながら、コミュニケーションを重視した活動を授業に取り入れる必要性を感じた。

### ライティング活動と効果的な評価について

研修中、日記を書くことが毎日の課題とされた。いくつかのトピックはやはり英語教育に関するものであった。10分程度の日記と言われていたが、実際「英語学習に対する日本の生徒の姿勢」「日本の英語教育の長所と短所は何か。」「英語教師としての目標は何か。」等の質問に考えをまとめて書くことは非常に時間がかかった。これらの質問もやはり問題意識を持ち、現状を分析し、教師の役割とは何かを考えるうえで有効であった。

これらの日記については、最後の授業で Malm 教授が評価例とコメントを付けて返却してくれた。文法的な間違いを指摘しただけのものから、共感的なコメントを記したもので様々な評価方法を示してくれ、教員からのフィードバックを生徒がどのように感じるか体験することができた。書くことへの生徒の動機付けのためには、褒めたり、共感的なコメントがやはり必要である。また、文法的誤りについても、例えば「時制」「語順」等の項目に絞って指摘することにより、生徒が意識して書くようになるということであった。目的に応じて、評価方法を工夫することが必要であると強く感じた。

### **Content-Based Language Program における音声指導**

Nguyen 教授の音声学についての講義は非常に興味深かった。音声学については大学時代に学んで以来詳しく学習することはなかったので、音声体系を再確認するうえで役に立った。しかし、インフォメーションギャップを利用した発音演習をいくらか実際にやってみたところ、“rub”と“rob”や“hut”と“hat”等の母音の発音を正確に聞き分けたり、区別して発音することにとっても苦労した。分かっているもうまく音が出なかったり、聞き分けることができない場面も多かった。もっと練習が必要だと実感した。意識して聞いたり発音したりするという習慣を身に付ける必要があると思った。

### **教育問題について**

#### **ハワイの公教育について**

研修中、ハワイの教育委員会を訪問する機会を与えてもらい、ハワイの公教育について話を伺うことができた。ハワイでは 1840 年に公立学校が設立され、現在 7 つの島に 285 の公立学校がある。教師一人当たりの平均生徒数は 25 人であり、各学校に配置されたスクールカウンセラーが生徒のメンタル面のサポートに当たっている。移民が多く様々な民族が入り交じっているため、民族間で起こる問題もあると伺った。また、別の問題として慢性的な教員不足を挙げられ、教員募集に力を入れているということであった。日本とは大きな違いである。国や文化が違うため多くの相違点があるのは当たり前のことであるが、子どもや子どもを取り巻く環境が変わり、そのことによって起こる様々な問題について憂慮するという状況は日本と同じであると感じた。

### **研究課題とプレゼンテーションについて**

CBI に関する講義を受ける中で、コミュニケーション型な授業を構築する必要があると痛感した。担当する英語の授業では、教科書を使いながら、相互交流的な活動を少しずつ取り入れることが言語技能を統合する上では望ましいと考えた。そこで、研究テーマを「相互交流活動を通してコミュニケーション能力を高める試み」とし、効果的な活動や教師の役割についてリサーチし、英語の教科書の単元を使って模擬授業を計画することとした。時間が十分でないため、リサーチを進めていくのには不安があったが、文献検索の方法からパワーポイントを使った効果的なプレゼンテーション方法まで教授に教えていただいたので、なんとか完成させることができた。最終日のプレゼンテーションには、7 名の方に参加いただき、様々な意見や感想をいただいた。英語を話す必要性がほとんどない日本の高校生に、どのようにして英語をコミュニケーション手段として使う状況を作り出すかが課題として挙げられた。インターネットなどの様々なメディアを使った学習方法の可能性などもアドバイスしていただき、参考となった。

## 課外活動について

授業以外の活動の中で最も印象に残っているのはホームステイである。ちょうど研修の中期に当たる週末に、2日間のホームステイを体験することができた。ハワイの生活について知り、文化を理解しコミュニケーションを通してお互いに理解するという貴重な機会であった。私は2人の幼い子どもがいる家庭にステイさせてもらった。パイロットの夫の Eric と ESL の教師経験のある妻の Kim はよい夫婦で、お互い家事や育児をうまく分担していた。3歳の Ryan と1歳の Ashley の子育ての真最中であるにもかかわらず、私を受け入れてくれたことにとても感謝している。Kim はイタリア語の教師の経験もあることから、共通の話題も多かった。彼女は正しい発音を身に付けさせることが学習の動機付けになり、自信につながると話してくれたが、同感である。

言葉に関して言えば、幼い子供がどのように英語を習得していくのかを垣間見ることは興味深かった。Ashley は赤ちゃん言葉の段階で“fish”のことを“fishy”と発し、一方で Kim は段階的に意味ある言葉を多く語りかけていた。例えば、青いかごの中にいる Ashley に「かご」「かごの中」「青いかごの中」そして「Ashley は青いかごの中にいるよ。」というように繰り返して語りかけていた。いわゆる言葉のインプットである。一方、Ryan は基本的な表現はできる段階であったが、状況に応じて（依頼の場面など）丁寧な表現を使おうとしていた。子供の言語習得においては、親が重要な役割を担うというのは、どの言語においても同じであると改めて感じた。

Kim はまた、多文化社会で生活する利点は、他の文化から学ぶことができることや便利だと思ったことを実際に生活に取り入れることができることだと話してくれた。彼女は日本のことにも興味を持ち、私に色々と質問してくれた。彼女の異文化に対する前向きな姿勢に刺激され、私ももっとハワイの文化を学びたいと思うようになった。相互理解のためには相手を知ろうとすることが重要であると思った。

わずか2日であったが、家族のように扱ってもらい、心に残る思い出ができた。彼らのおかげで、ハワイを身近に感じることもできた。

## 最後に

大学での研修は、まさに「英語教育」というトピックで「聞く」「読む」「話す」「書く」という4技能を統合する Content-Based Instruction を体験させていただいた。演習では生徒の立場と教師の立場を交互に体験し、生徒の視点から「教える」ということについて考えさせられた。褒めたり、励ましたりといった教師の支援がどれだけ学習の動機付けになるか、実際に教授に支援していただく中で実感することができた。自分自身の「教える」姿勢を見直さなければならない。

また、Malm 教授は「生徒には難しくできない」と思っていることでも、実際にやってみると思った以上によくでき、驚かされることが多いと言われていた。そのためには段階を追った指導が必要であるが、「無理」と決め込まず、「やってみる」という前向きな考え方を教師が持つ必要があると感じた。今回学んだ具体的方法や活動をどのように日々の授業に生かしていくかがこれからの課題である。

3週間という期間は、自己を振り返り「もっと勉強しなければならない」という思いを強くさせてくれるものであった。それが一番の成果だと感じる。日常においてどれだけ自分を英語に触れさせることができるかという自己研修の必要性、またインプットだけでなくアウトプットの場の必要性も感じた。英語教師であると同時に英語学習者であることも意識し、コミュニケーションの手段として自ら英語を使う機会をもっと増やしたいと強く感じた。

最後に、このような有意義な研修の機会を与えていただいた広島県教育委員会，K C C 及び関係の方々に心から感謝を述べたい。